

『ガンダーラにおける仏伝図の研究』  
龍谷大学大学院文学研究科学位（課程博士）申請論文 要旨

上枝いづみ

1. 構成

序 論

- 第一節 ガンダーラにおける仏伝図制作の重要性
- 第二節 ガンダーラの仏伝図の配列と場面選択
- 第三節 ガンダーラの仏伝表現の特質
- 第四節 ガンダーラの仏伝図と仏伝文献
- 第五節 本論の目的と研究方法

第一部 ガンダーラ仏教寺院における仏伝図の配列に関する諸問題

- 第一章 主塔円胴部を飾った一代記的仏伝表現  
—サイドゥ・シャリフ I 主塔円胴部の仏伝図浮彫の検討—  
はじめに
  - 第一節 主塔円胴部周囲の仏伝図浮彫の検討
  - 第二節 浮彫の年代と表現結びにかえて
- 第二章 小塔円胴部を飾った一代記的仏伝表現  
はじめに
  - 第一節 小塔円胴部周囲の仏伝図浮彫の検討結び

第二部 ガンダーラ仏伝図における誕生場面の形成に関する諸問題

- 序章
  - 第一節 ガンダーラにおける「誕生」の表現
  - 第二節 誕生伝説の背景に関する先行研究
  - 第三節 本研究における目的および使用する仏伝文献
- 第一章 「誕生」図の諸問題  
はじめに
  - 第一節 「誕生」図、「誕生・七歩」図の表現
  - 第二節 文献に現れた「誕生」図の図像的特徴結び
- 第二章 「灌水」図の諸問題  
はじめに
  - 第一節 「灌水」図の表現
  - 第二節 文献にみる「灌水」図の図像的特徴結び

結語

第三部 ガンダーラ仏伝図における競試武芸図形成に関する諸問題

- 序章 ガンダーラの競試武芸図とその背景  
はじめに
  - 第一節 ガンダーラの競試武芸図概観
  - 第二節 文献にあらわれた競試武芸図の図像的特徴結びにかえて

## 第一章 レスリング図の諸問題

はじめに

第一節 「レスリング」の説話概観

第二節 「レスリング」図の表現—競技者の図像の二つのタイプ—

第三節 スワート地方出土の作例

第四節 ディール地方出土の作例

第五節 ガンダーラ盆地出土の「レスリング」図像

結び

## 第二章 「擲象」図の諸問題

はじめに

第一節 「擲象」図と仏伝表現系統

第二節 ガンダーラの「擲象」図の表現

第三節 文献資料に記された「擲象」図の図像的特徴

第四節 『大唐西域記』の伝える「擲象」説話と象坑

結び

## 結語

## 結 論

引用・参考文献

図版一覧

付 録

- ・ 地図
- ・ 付表：誕生に関連する仏教文献の記述一覧
- ・ 作例一覧

## 2. 論文要旨

〔本研究の目的〕

一世紀から三世紀にかけて、西北インドに位置した古代ガンダーラ地方では仏伝図が盛んに制作された。それまでのインド古代初期美術には表現されなかった新たな仏伝場面がガンダーラで数多く制作され、釈迦の成道以前の諸場面や、「涅槃」の姿も当地で初めて造形化されている。さらにガンダーラでは、釈迦の生涯について「誕生」前後から「涅槃」前後までの場面を連続させ、年代を追って伝記的に表すという「一代記的仏伝表現」と呼びうる仏伝表現が成立している。その構成では、「出城」以前の菩薩時代に多くの場面数が使われている点は注目しうる。このような仏伝表現は、実はインド内部には発達せず、ガンダーラでの成立以降は、具体的な「誕生」や「涅槃」の説話表現と共に、中央アジアを経て中国そして日本へと伝播した。この点を鑑みれば、仏伝の伝播と変容のなかで当地の仏伝図制作の果たした役割は大きく、その成立に関する考察は重要である。しかし、ガンダーラ独自の「一代記的仏伝表現」について主眼とした研究はみられない。そこで本研究では、ガンダーラの仏伝図制作の諸相について、ガンダーラの仏教寺院では当初、仏伝図はどのように配列されていたのかという全体の構成に関する問題、そして、仏伝図のそれぞれの場面はどのような表現をみせているのかという表現上の特質の問題という二つの側面から総合的な検討を加え、ガンダーラで独自に発達した「一代記的仏伝表現」の制作を支えた思想や当地で流布していた仏伝の伝承、文化的背景を明らかにすることを目的とする。

以下に本論での内容とその要点をまとめる。

〔本論〕

序論では、ガンダーラの仏伝図の特質と、ガンダーラの仏伝図を解釈していく上で必要となる仏教文献および、ガンダーラの仏教信仰を考察する上でのこれらの文献の使用方法について述べ、本研究における図像と文献資料の比較検討の意義を明確化している。

インドにおける仏伝図の表現展開が、叙景的で叙情性に富む傾向、そして聖蹟を中心に釈迦の

事蹟をまとめる傾向へと発達したのに比べると、ガンダーラにおける仏伝図の発達は大きく異なる。ガンダーラの仏伝図の表現では、場面を水平方向に展開させ、一齣ずつ読むように連続させる点に特徴があり、叙事的・伝記的な独特の表現展開として注目されている。このガンダーラの仏伝図にみられる叙事的・伝記的な傾向と、ガンダーラにおける新たな仏伝場面の飛躍的な増加という問題を関連させ、伝記的な表現が行われる背景として釈迦の生涯の事蹟を編年していく傾向があるとの見解もみられる。また、近年ではガンダーラの仏伝図の全体の配列についても研究が行われ、当地の仏伝表現には、(一) 釈迦の求道の説話、および成道後の様々な教化活動や布施にまつわる説話に主眼をおく説話表現と、(二) 釈迦伝の前半部（特に幼年・青年期）と「涅槃」の場面の前後をあわせて釈迦の一代記を表す伝記的な仏伝表現という二系統がみられることが明らかとなっている。

本研究では、これらの二系統について (一) の系統を「教化・神変説話表現」系統、(二) の系統を「一代記的仏伝表現」と呼ぶ。そして序論では、これらの二系統の表現の比較、そして、インド内部の他地域の仏伝図の比較検討によって、ガンダーラの仏伝図の独自性として注目されている叙事的・伝記的仏伝表現とは、とりわけ (二) の「一代記的仏伝表現」系統に顕著にみられることを指摘した。(一) の「教化・神変説話表現」系統の仏伝図の構成には、年代に沿った配列は認められず、必ずしも叙事的・伝記的、あるいは編年的表現とはいえない。また、(一) の「教化・神変説話表現」系統を構成する各場面は、それまでの古代インド初期美術の時代（パールフット・サーンチー・ボードガヤー）に既に表されていた主題も多い。これに対して、(二) の「一代記的仏伝表現」系統にこそ、釈迦の事蹟を年代に沿って配列しようとする叙事的・伝記的傾向があるといえる。さらに、ガンダーラで新たに創始された仏伝の場面は、この「一代記的仏伝表現」系統と深く関わる。すなわち「燃燈仏授記」や「託胎靈夢」にはじまり、釈迦が母の右脇を開いて出生するという「誕生」の具体的な場面や、太子として過ごした宮廷での生活、「涅槃」およびその後の仏舎利に関する場面である。これらの点から、従来指摘されてきたガンダーラの仏伝図独自の叙事的・伝記的表現とは、この「一代記的仏伝表現」の成立に関わって起こったものとする。

以上の表現特質をもつガンダーラの仏伝図の制作はどのような思想によって支えられていたのだろうか。序論では次に、このようなガンダーラの仏伝図の伝えている伝承内容や、表現にある意味を明らかにし、制作を支えた思想について考察していくためには、仏伝図と文献との比較検討を重視することを述べる。

ガンダーラの仏伝図は、その作例のほとんどが仏教寺院に配列されていた原位置を離れ、断片の状態にあり、また場面数も際立っていることから、未だに場面未比定の浮彫も存在する。このような状況から、フーシェの研究 (A. Foucher, *L' art gréco- bouddique du Gandhâra*, 3vols, Paris, 1905-51. Paris : E. Leroux) 以来、ガンダーラの仏伝図研究は仏教文献を用いた主題比定および、各主題の図像学的考察が中心である。フーシェの研究は主にサンスクリット語、パーリ語文献を用いて数多くの場面比定に成功し、その比定及び解釈は現在でも踏襲されている。このように仏伝の場面や展開について、特定の文献の記述をいわゆる「典拠」として用いて読み解いていく手法は、ガンダーラの仏伝図の事例に限らず仏教史、美術史研究において広く行われている。ただし近年では、インド世界の仏塔および浮彫彫刻を考察するにあたって、使用する文献群を峻別する必要性が指摘される。例えば、紀元前三世紀から一世紀にかけて制作された仏塔の制作背景を考察した W. ウォルターズは、考察にあたって同時代的な文献群をまず設定し、彫刻と文献の記述の相互関係を指摘した。この中で彼は、紀元前に属するこれらの仏塔やそこに刻まれる彫刻を考察するにあたって、これまでの研究では、文献の歴史性は無視され、専ら『ディヴィヤーヴァダーナ』 (*Divyāvadāna*)、『ラリタヴィスタラ』 (*Lalitavistara*)、『マハーヴァストゥ』 (*Mahāvastu*)、『ジャータカマラー』 (*Jātakamāla*)、『ジャータカアッタカター』 (*Jātakatthakathā*)、『ダンマパダアッタガター』 (*Dhammapadaṭṭhakathā*) という一般に一世紀から五世紀に成立したと考えられる文献の内容が、まるで銘文と同様であるかのように用いられており、この銘文と文献の間の「時代錯誤」が幾多の仏伝の歴史的段階を不明瞭なものにしていると述べている。

このような姿勢は、ガンダーラの仏伝図を考察するにあたってのみならず、ガンダーラの浮彫制作年間よりも後代に成立した文献群を彫刻の内容と直接比較するのではなく、考古学的手法を重視するという立場をとる研究の必要性も指摘されている。

しかしながら、本研究では以下の点により、紀元一世紀から三世紀にかけて制作され続けたガンダーラの仏伝図の作例から、この時代の仏教信仰の様相や制作背景を考察していくにあたって

は、ウォルターズの批判に述べられたサンスクリット語のいわゆる「仏伝文献」との内容および、そのみならず、後代に中国で翻訳された漢訳文献であっても、その内容と比較することはむしろ必要不可欠であると考えられる。

まず、フーシェの研究では、文献を峻別する意識はなかったかも知れないが、『ラリタヴィスタラ』、『マハーヴァストウ』、『ディヴィヤーヴァダーナ』を使用することで多くの浮彫の場面比定に成功している。

その一方で、ガンダーラの仏伝図、説話図のなかにはこれら現存するインド成立の文献の内容のみでは解釈できない資料が多数あり、漢訳経典を用いることで解釈が可能となるものが存在している。フーシェも後に漢訳を用いて新たな場面比定を行ったほか、近年では小谷仲男により、漢訳文献の記述を用いて新たな場面比定が行われたことで、ガンダーラの仏伝図の考察における漢訳文献の有用性は再度注目されている。

これに加えて、仏教文献学研究における以下の成果も考慮すべきである。すなわち、サンスクリット語の仏伝文献『ラリタヴィスタラ』の原初の形態の成立年代は「150年頃の西北インド」と推定されている。この推定年代は、ガンダーラの仏伝図制作の最初期からは後代といえるが、二世紀から三世紀にかけて制作された片岩の浮彫の制作年代からみても図像と文献の記述の影響関係を比較することは必要である。

さらに、先行研究によって指摘されている、ガンダーラの「一代記的仏伝表現」の場面配列と、仏伝文献の構成内容との結びつきは注意を惹く問題である。まず、宮治は、「燃燈仏授記」や「託胎霊夢」などで始まり、多くても「帰郷説法」までを述べて終わるという性格をもついわゆる仏伝文献群と、涅槃前後の記述が詳しい『涅槃経』の内容を合わせると、「一代記的仏伝表現」の構成が出来上がる、と述べている。そして最近では、岡本健資により、クシャーン朝下のガンダーラの成立と考えられ、尚且つ「誕生」から「涅槃」までの釈迦の一代記を描く仏伝文献—『ブダチャリタ』や『僧伽羅刹所集経』、および、『ディヴィヤーヴァダーナ』や、『根本説一切有部毘奈耶雜事』の記す釈迦の一生の記述の場面構成は、ガンダーラの仏伝図の「一代記的仏伝表現」の配列と類似性を持つことが論証されている。

なぜガンダーラの仏伝図と仏伝文献には共通性がみいだせるのか、さらに、ガンダーラからは地域的にも年代的にも離れた漢訳文献に、なぜインド側の文献資料では解明できなかったガンダーラの仏伝や説話図を解釈できる内容がみられるのかという問題の解明は今後の課題となる。しかしながら、本研究では、以上に述べた事例からも、後代に成立した文献であるという理由のみで仏伝図浮彫の考察から文献比較を切り捨てるのではなく、このように関連性を指摘できる事例を収集しつつ、ガンダーラの仏伝図の示す主題および、その図像的特徴がどのような文献にどのように伝えられているのかを考察し、文献の成立状況を視野に入れながらも用いることで、ガンダーラの仏伝図制作の背景を追求することを重要と考える。

本研究の第一の目的としては、ガンダーラの仏伝図の図像学的特徴に着目した立場から、浮彫の出土地による地域的な、そして一世紀から三世紀という期間に当然生じている時代的な差異や共通点をふまえ、ガンダーラにおける仏伝流布の状況をまず作例から明らかにする。そして、もう一つの目的として、当地の浮彫の図像的特徴は如何なる文献に如何に記述されているのかという着眼点から現存する文献資料を扱い、特徴的な記述を抽出する。この結果から、図像学的考察のみならず、一～三世紀の西北インド、すなわちガンダーラ地方の仏伝の伝承と関わりが深い仏伝文献を指摘していくことを目指した。

第一部では、本研究の主眼であるガンダーラにおける「一代記的仏伝表現」の全体の配列状況を確認するために、第一章として、「一代記的仏伝表現」の最古の例である可能性が高い、ガンダーラ北部スワート地方のサイドゥ・シャリフ I 遺跡主塔円胴部の周囲を飾った浮彫群をとりあげた。次いで第二章として、ガンダーラに特有のいわゆる奉獻小塔の円胴部周囲を飾ったとみられる一連の浮彫群の考察を行った。第二章では、同一小塔を飾った一連の浮彫群として先行研究でも指摘されている作例に加えて、やはり同一小塔の円胴部を飾っていた一連のものとして置き戻すことが出来ると筆者が想定した浮彫群を合わせて、全部で十浮彫群を設定している。これらの十浮彫群のそれぞれが示している場面配列の傾向や各場面の表現について比較検討し、「一代記的仏伝表現」を構成している全体の場面とその配列について改めて確認を行った。なお、各浮彫群の比較により、これまで行われてきた場面比定や配列の再構成に疑問を生じる作例については

適宜再検討を行い、本研究で再配列を行った。

サイドゥ・シャリフ I 主塔浮彫群については、発掘報告者 D.ファッチェンナによって、一世紀中葉から後半という、ガンダーラの仏伝図制作の最初期の制作である可能性を示唆されている。

これらの浮彫が円胴部の周囲という場所でどのように配置されていたかを確認すると、釈迦の「誕生」に関する場面の連続である【誕生サイクル】や、太子時代の【宮廷生活サイクル】、「草刈り人の布施」など成道以前の【求道サイクル】の場面が円胴部周囲の半分を占め、教化場面は少なく、その後【涅槃サイクル】に直結したことが想定される。そして、このようなサイドゥ・シャリフ I 主塔周囲の仏伝浮彫の構成は、その後、二～三世紀にかけてガンダーラで一般化する小塔周囲の「一代記的仏伝表現」とある程度共通していたとみることができる。

サイドゥ・シャリフ I 遺跡主塔周囲では、当初は 65 ほどの場面が連続して配置されていたと推測されているが、本研究で検討した小塔浮彫群の十例によって導き出された場面総数も 50 ほどを数える。これらの場面数からも、当地ではいかに釈迦の生涯を詳しく物語ろうとしたかがうかがえる。なお、小塔円胴部の浮彫群の観察によっても、「一代記的仏伝表現」を構成する場面のうち、釈迦の【誕生サイクル】や【宮廷生活サイクル】の場面数が多い点は注目される。本研究での場面観察によっても、50 近くを数えた場面数のうち、【誕生サイクル】の場面が 19 場面、【宮廷生活サイクル】の場面が 15 場面となる。このような成道以前の太子時代への関心は、それまでのインド古代初期時代の仏伝図はもとより、その後のインド内部ではみられない。

ただし、サイドゥ・シャリフ I 遺跡主塔周囲の「一代記的仏伝表現」と小塔の例では、成道以前を中心として「誕生」から「涅槃」までを連続的に表すという全体の場面配列は共通していても、異なる点もあることは興味深い。それはとりわけ、小塔円胴部周囲の作例では、釈迦の前世譚のうち、現世での成道が確定する「燃燈仏授記」の場面を仏伝の起点とする作例が少なからず認められることである。「燃燈仏授記」の場面はサイドゥ・シャリフ I 主塔浮彫群には見出されず、なお、スワートでの最初期の浮彫様式に位置づけられるドロワー・グループに属する浮彫の作例にも未だ確認されていない。この事例は、スワートの最初期における仏伝図制作の時期に比べて、その後ガンダーラ全域において小塔に「一代記的仏伝表現」をとる仏伝図が設置されるようになった時期では、釈迦の捉え方、すなわち仏陀観が発達した段階にあったことを指すであろう。その仏陀観の発達とは、釈迦の菩薩時代への関心として理解されるように思われる。

一方で、ガンダーラの仏伝図制作の最初期の時代においては、宮治昭が指摘するように「釈迦の成道以前と以後が区別され、覚者となった仏陀に対して人間像で表すことの躊躇があり、成道以後の釈迦の場面を避ける傾向があった」可能性が考えられる。この意見は、先述のドロワー・グループの浮彫群においても太子時代の主題に対して教化場面の作例が少なく、インド古代初期美術の伝統を汲むかのように「釈迦の象徴的表現」をとる作例もみられるという傾向に対して説得力のあるものである。ドロワー・グループに位置づけられるサイドゥ・シャリフ I 主塔円胴部の浮彫群についても、その配列について、同様の指摘があてはまる可能性がある。すなわち、サイドゥ・シャリフ I 主塔の円胴部において「一代記的仏伝表現」の配列をとる仏伝図が、成道以前の場面を中心として教化場面が少なく、釈迦の姿を現す主題の存在も明確には指摘されていないという問題には、「成道後の釈迦の姿を刻むことへの忌避」傾向が存在しており、成道以前の菩薩時代であれば制限なく人間像で釈迦を表すことができたという背景も考えられる。

これに対して、その後の制作となる小塔円胴部周囲の「一代記的仏伝表現」の作例群をとりあげて場面構成を確認したところでは、例えば、燃燈仏の姿、「梵天勧請」と比定した「釈迦坐像と礼拝者」という図像をもつ場面が認められる。このように、成道後の釈迦の姿、あるいは仏陀の姿が問題なく表現されていても、教化場面が増えるのではなく、やはり成道前の出来事が半数以上を占めるという構成は変わらない。このことから本研究では、ガンダーラにおける「一代記的仏伝表現」とは、釈迦の成道に至るまでの事蹟、釈迦がどのようにして悟りを開いたかという菩薩時代への関心によって発達した可能性を指摘する。

本研究第二部、第三部は、当地において、「一代記的仏伝表現」の多くの区画を占める釈迦成道以前の場面が形成されていった背景に関する図像学的考察となる。

第二部「ガンダーラ仏伝図における誕生場面の形成に関する諸問題」では、釈迦の今生での誕生という出来事について、ガンダーラの浮彫からどのような伝承がうかがえ、当地ではこの出来事がどのように捉えられていたといえるのか検討している。

具体的には、まず序章において、インド古代初期には「誕生」の場面は具体的に現れていないことを確認し、ガンダーラではじめて説話表現となった「誕生」図や、続く「灌水」図について、それぞれ第一章、第二章としてとりあげた。

第三部「ガンダーラ仏伝図における競試武芸図形成に関する諸問題」では、インドの仏伝図の表現展開のなかでは、ガンダーラの仏伝図にのみ顕著となる釈迦の宮廷生活の場面の形成、とりわけ多彩な競試武芸図の表現をとりあげ、図像表現の特徴とその背景について述べている。第三部序章では、ガンダーラにのみ様々な種類の競試武芸図が確認されることに着目し、これらの場面を概観すると共に、どのような文献がこれらの競試武芸図の特徴と合致する内容を伝えているのか比較検討している。このなかでは、時代は下る可能性はあるが、釈迦の競試武芸説話に類似する内容をもっているクリシュナ神話を比較対象としてとりあげている。

また、【誕生サイクル】と異なって、競試武芸の場面では、仏伝図の作例においても、競試武芸を詳しく述べる文献においても、順序や内容に異同が大きく、伝承の混在傾向が認められる。このような伝承の混在の状況を探るために、第三部第一章では、ガンダーラでの制作地域に起因する図像の違いが読み取れる「レスリング」図をとりあげて、ガンダーラの各地域での伝承を探った。そして、第二章として、作例と文献の記述の両者ともに、競試武芸図の冒頭にも、そして最後としても配置されている「擲象」の場面をとりあげて考察を行い、少しでも伝承の地域性を明らかにすることに努めた。

以下では、第二部で行った「誕生」場面の形成の問題、第三部で行った競試武芸図の形成の問題に関する考察において明らかとなった内容を、ガンダーラにおける宗教文化混淆の様相、浮彫の図像的特徴からみた仏伝流布の様相、仏伝図と仏伝文献との関わりという三点からまとめておく。

まず、仏伝図の観察により、宗教文化混淆の様相が明らかになった点について述べておく。一般にガンダーラ美術とは、ギリシア、ローマ、ヘレニズム、イラン美術などの西方要素の色濃い作風という認識がある。本研究においてはその西方要素の指摘のみならず、さらに仏伝図に認められるインド的要素にも着目した。

「誕生」図や「灌水」図で造形化された釈迦の幼児としての姿には、先行研究で指摘されるように、ギリシアやローマ神像を表す形式が用いられた可能性がある。また、ガンダーラの「レスリング」図を観察すれば、インド古代初期美術にみられる「レスリング」の表現よりも、ギリシア、ローマの表現伝統を受け継いだ図像であると指摘できる。ただし、場面を詳しくみていくと、インド的表現もみることができる。例えば、「誕生」図において、天衣を打ち振り、指笛を吹く讃嘆の仕草をとる男性神の図像は、ブラフマー神よりも高い登場頻度で表現されており、この図像は紀元前一世紀のバールフットにみられる讃嘆神の表現伝統に基づいている。そして、この男性が「誕生」図に頻出する理由として、釈迦の誕生を神々が祝福するという、成立の古い『スッタ・ニパータ』の記述にみられる伝承が、ガンダーラの制作者側にも浸透していたことがうかがえる。この讃嘆の仕草をとる男性像といい、マーヤーの背後に控える女性達といい、仏伝図に登場する人物像の体軀表現は確かに、ギリシア、ローマ美術をはじめとする西方要素の強いものである。しかし、彼らの動作や登場する意義については、インドの表現伝統を忠実に受け継いだものといえる。

そして、その制作の根底には「ヒンドゥー文化」と呼びうる精神的土壌が醸成されていることが認められる。例えば「誕生」関連の場面では、釈迦の「自右脇生」やインドラ、ブラフマー神の相互補完的性格、「灌水」図にみられる右手での灌水の強調において、浄・不浄の観念や、これと強い結びつきのあるカースト制度に関わる思想の影響が認められる。さらには原実が指摘する、「誕生伝説の背景」としての「生苦」の観念にも関わる可能性も含め、ガンダーラで初めて「誕生」場面が形成される制作背景には、十分にインド的文化である「ヒンドゥー文化」の強い影響がみてとれる。

このように、ガンダーラの仏伝図に認められる「ヒンドゥー文化」の醸成は、釈迦の競試武芸説話図が当地において多彩に発展していることとも無関係ではない。それは、釈迦の競試武芸説話とクリシュナ神話が類似するという問題と関わっている。いまのところ、ガンダーラにおける競試武芸説話図の制作や発達と同時代的に、クリシュナ神話の「カンサの誅殺」説話がどの程度流布していたのかという問題については、美術資料では「悪魔ケーシと戦うクリシュナ」とされる浮彫は確認されるものの、クリシュナによる「レスリング」や「擲象」を表した作例は見つかっていないため、今後もさらに図像と文献の比較考察を進める必要がある。しかし、本研究第三部での

比較検討からは、仏伝とクリシュナ神話は相互に影響し合った可能性が高いと指摘している。クリシュナ神話との混淆によって、釈迦の競試武芸の伝説には、仏教的な慈悲や不殺生の精神が強調されたと思われる。それは、「レスリング」図において「水を注がれ介抱される男性像」として敗者の蘇生の様子が表されること、文献の記述でも、太子はただ腕力を誇るデーヴァダッタのような他者とは異なる目的で彼の類い希なる武芸の力を用いるという記述が共通してみられることから、太子の慈悲の精神が強調されているように思われる。また、「擲象」図にみられる図像や構図は、他の主題と比べて西方要素の影響が薄く、当地で新たに創作された図像とみなされることも、インド文化の影響と考えられる。

従来、ガンダーラ美術研究では、作例にみられる西方要素の影響の指摘が主流となっている。しかし、今後は仏伝図の図像的特徴、特に登場人物の動作や登場頻度、構図まで精査し、そこにみられるインド的な表現伝統や精神文化を指摘していくことでより深い理解が得られるものと考えられる。

次に、「誕生」図から競試武芸図までにわたって、ガンダーラ独自の主題を考察したことで推定される、当地方に流布した仏伝伝承についてまとめておく。ガンダーラでは数多くの「誕生」図が出土する。このことは釈迦の「誕生」に対する当地の関心の深さを物語るが、その浮彫は地域や時代に関係なくいずれも「自右脇生」であることは看過できない。そして、「自右脇生」の直後には時として「七歩」が物語られ、「灌水」が続いていたものと考えられる。先行研究でも指摘されるようにガンダーラの「灌水」図では、他地域のように、龍王灌水の構図をとるものが極めて少ない。このような特徴が数多くの「灌水」図の作例に共通していることから、ガンダーラでは一世紀から三世紀という石彫の浮彫制作の長い期間にも関わらず、釈迦の誕生時には「母の右脇から生まれ」、「インドラ神によって受け取られ」、「インドラ、ブラフマー両神による灌水」を受けたという口頭伝承が行われていたものと考えられる。

一方で、「誕生」後の場面となる、太子時代の競試武芸説話については、ガンダーラの各地で様々な伝承が混在しながら発達したのと考えられる。このような競試武芸説話の伝承が混在する様相は、浮彫の表現のヴァリエーションにあらわれている。まず、「レスリング」図には、ガンダーラのなかでも地域差が認められた。スワート地域の初期の制作とみなされる作例には、「水を注がれ介抱されている敗者の男性像」の場面を表す傾向が顕著であり、その後ガンダーラの全域では組み合う競技者の図像のみで「レスリング」を表すのが主流となる点である。また、競試武芸説話の配列順序も地域や年代によって様々であった。それは、前後の場面が現存し競試武芸の前後関係が確認できる作例の検討によって、「擲象」が競試武芸の冒頭に配列される作例、あるいはその最後に配列される作例が認められたことから推測される。ただし、第三部第二章で確認したように、現存作例の割合のみで考えると、ガンダーラの伝承では様々な競試武芸の最後に「擲象」が物語られることが多かった可能性がある。

最後に結論として、以上の点を整理した上で、最後に、ガンダーラで流布した仏伝の伝承と、文献の記述との関係を述べて、これらと関連する問題を指摘した。

従来、ガンダーラにおける叙事的・伝記的表現の背景思想として、あるいは同時代的に関連する思想として、仏伝文献の記述の存在や内容の一致が指摘されてきた。なかでも、ガンダーラの「一代記的仏伝表現」系統の浮彫の配列と、釈迦の一生を物語る『ブッダチャリタ』や『僧伽羅刹所集経』をはじめとした、釈迦の一生を通じて物語ろうとする文献の記述の傾向は、確かに一～三世紀のガンダーラ地方と関連性が高いと考えられる。

しかしながら、本研究の目的の一つとして、第二部から第三部を通じて、実際に仏伝浮彫にみられる図像的特徴について関連性のある文献の記述を抽出してきた結果、ガンダーラに特徴的な「自右脇生」や多彩な競試武芸の場面を叙述していく傾向は、一代記的仏伝の構成をもつ『ブッダチャリタ』や『僧伽』には認められないことが明らかとなった。ガンダーラの「誕生」場面の図像的特徴や、競試武芸図の諸特徴に関連性のある記述については、『ブッダチャリタ』や『僧伽羅刹所集経』が沈黙する一方、サンスクリット語、漢訳のいわゆる「仏伝文献」に認められるのである。

すなわち、本研究でSBVグループと呼んだ『根本説一切有部毘奈耶』『破僧事』とその漢訳、『衆許摩訶帝経』の記述、そして同様にLv.グループと呼んだ『ラリタヴィスタラ』やその漢訳（『普曜経』、『方広大莊嚴経』）、『マハーヴァストゥ』というサンスクリット語の仏伝文献、そしてい

わゆる漢訳仏伝経典である。

このうち、本研究においてSBVグループと言及してきた競試武芸については詳しく物語るものの、釈迦の誕生を物語る上で「自右脇生」を伝えていないことには留意しておかねばならないが、これらの共通性として、長いものでも、「初転法輪」や「帰郷説法」の事蹟までを述べて一経典としての目的を終えるという特徴が共通する。

とりわけ、本研究の考察では、ガンダーラの仏伝図の内容と、Lv.グループとしてまとめた『ラリタヴィスタラ』とその関連漢訳の記述が近いものと指摘できる。この仏伝経典では、釈迦の「自右脇生」を支持することに加えて、ガンダーラ独自の「インドラ・ブラフマー神による灌水」表現が文献の記述のなかでは唯一認められる点は重視したい。また、Lv.グループの三文献のなかで「擲象」説話の発達も認められる点も、『ラリタヴィスタラ』の伝承と西北インドとの関わりを示しているように思われる。この点に関して、本研究の考察結果は、『ラリタヴィスタラ』の原初の形態は二世紀中葉の西北インドに成立したと推測する文献学研究成果に対して、美術資料からの証左を提供するものと思われる。

これに加えて、仏伝図から読み取れる仏伝伝承と漢訳文献との結びつきも看過できない。本研究の考察結果では、まず、『仏本行集経』の記述が注目される。『仏本行集経』は隋代訳出であり、ガンダーラの浮彫制作から地域的にも時代的にも後代に成立したものである。しかしながら、ガンダーラの「誕生」図において徹底されている「この世に出生した釈迦をインドラ神がはじめに受け取る」という理由について解説する唯一の記述が認められ、また競試武芸のうち「擲象」をその最後におく点も『仏本行集経』のみに伝わり、ガンダーラの仏伝図と呼応した伝承がみられる。なお、『仏本行集経』のみならず、漢訳文献の記述によってガンダーラの仏伝図が解釈される例は認められる。『修行本起経』および『太子瑞應本起経』の記述の検討により、「レスリング」図にみられる「水を注がれる敗者の男性」像が、レスリングに関わる説話とともに理解され、装身具をつけた敗者の男性像についても、太子の従兄弟デーヴァダッタに代表される登場人物と比定することができる。

このような漢訳文献の比較研究は、ガンダーラの仏伝図の背景としてどのような伝承が流布していたのか、さらにその制作に関わる仏教思想を捉えていく上では今後重要な視点となろう。もちろん、我々が参照できる現存の文献は、ガンダーラの仏伝図の初現よりも後代の成立である。しかし、漢訳仏伝文献を含めて、サンスクリット仏伝文献や、漢訳仏伝文献の目的に関わる、釈迦成道の因果を説こうとする思想は、一世紀から三世紀にかけてガンダーラで起こった釈迦の成道以前の事蹟への関心の高まりに関連するものと考えられる。今後とも、なぜ時代的地域的に離れた仏教文献にガンダーラの仏伝図の特徴が見出せるのかについても留意しながら考察を進める必要がある。

この考察結果と関連する問題として、ガンダーラの仏伝制作に関わる釈迦の捉え方、仏陀観の検討がある。本研究でとりあげた互いに関連性のある記述を認めた文献群の間においてもその仏陀観は様ではない。今後もさらに他の主題の図像的特徴と文献の記述の比較検討による事例を集めながら、ガンダーラの「一代記的仏伝表現」を支えた仏陀観について精査していく必要がある。とくに「一代記的仏伝表現」系統における釈迦前半生への関心と【涅槃サイクル】、涅槃経類との関わりも含めて考察していくことが重要となる。

このようにガンダーラの「一代記的仏伝表現」を支えた仏陀観については今後の課題となるが、結論では、本研究の考察結果から読み取れるかぎりの釈迦の姿について述べている。ガンダーラでは、釈迦の「誕生」には文献に残る伝承のなかではもっとも神話的な「自右脇生」が好まれ、そしてその「誕生」を表すために、ギリシア、ローマにおける神像の表現が投影された可能性がある。さらに、釈迦には太子時代から奇跡的な能力が求められ、その姿はクリシュナ神のような怪力を誇る神格と混淆した関連性をも予想させる。このような釈迦の姿は、『ラリタヴィスタラ』のような「奇跡的表現に満ちた大乘仏伝」の内包する初期大乘思想、大乘菩薩観の発達と関連すると考えられる。果たして、ガンダーラにおける仏伝の愛好は、「歴史的な釈迦の伝記である仏伝」を求めたものかどうか、今後とも追求すべき問題である。